「平成 22 年度　第１回真名川ダム弾力的管理検討委員会」　議事概要

〇日時：平成 22 年 6 月 21 日（月）14 時～16 時
〇場所：多田記念大野有終会館　１階　１０６号室
〇議事内容

1. 平成２２年４月のフラッシュ放流試験結果
2. 平成２２年度の弾力的管理試験の実施方針

について事務局から説明。
主な質疑応答、意見の内容は、以下のとおりである。

■平成２２年４月のフラッシュ放流試験結果について
【物理環境】
（委員）
・フラッシュ放流により物理環境についてどのような変化を期待しているのか？
（事務局）
・本来河川は、流量の増加に伴い川幅がもっと広がるようなものであると考えられるが、真名川は実際にはそうなっておらず、流量の増加に見合って川幅が広がるような河川としていきたいと考えている。例えば河岸の肩の勾配がもっと緩やかであれば水面幅ももっと広がったはずである。
（委員）
・今後、流量を大きくすることで川幅を広げていくのか？
（事務局）
・流量の増加のみで川幅を広げることは難しいため、河岸の肩を緩やかにする等の自然再生試験とフラッシュ放流とを組合わせて川幅を広げることを考えている。
（委員）
・今後は緩傾斜的な河岸にするために何か仕掛けをすることが必要ということか？
（委員）
・川が自ら地形を作るという動きに少し手を加えて川が動く手助けをしてはどうか。
（委員）
・普段は非常に少ない流量であり、それを有効に使うには川幅を広げずに流すのがいいのではないか？
（委員）
・「川幅を広げる」というのは普段の流量で川幅を広げるというのではなく、河原を作ることにより、川幅が普段は狭く流量が多くなると広がるようにするという意味である。また、河床の土砂が動き、蛇行した川となるように土砂の供給等をするといいのではないか。

【置石・置土】

（委員）

・置石自体は動いていないのか？

・置土地点のメッシュ写真は同じところを写しているのか？

（事務局）

・置石自体は動いていない。

・置土地点の 4/13、4/15、6/9 のメッシュ写真位置は若干ずれている。

（委員）

・大きい石も少しは動いているはずである。水辺の楽校では今年のフラッシュ放流や融雪出水で大きめの石が動いたことが確認された。

（事務局）

・H19 掘削水路の横断図にみえる置土は少しずつ動いて自然な形になってきている。表面は同じような粒径に見えるが、順番に少しずつ動いて同じような粒径が表面にあるだけではないかと考えられる。

【地下水】

（委員）

・地下水位は河川流量の波形より 2 日ほど遅れて変動しているようにみえる。融雪出水が非常に多かった 4 月のデータのみでなく他の月のデータも載せて欲しい。

（事務局）

・データはあるので整理する。しかし、河川流量が多いときは雨が降っており地下水位の変動が河川流量と雨のどちらの影響であるのかはわからない。

【付着藻類・底生動物】

（委員）

・カワヒビミドロは温度が高いから増えてきたのではないかと書かれているが、温度が低いと増えるとある人からきいている。

（事務局）

・カワヒビミドロは冬～春に繁茂することが知られており、今回の調査では 5 月頃増殖し、水温が上昇した 6 月頃には消失していたことから温度が高い場合には姿を消すと推察している。

（委員）

・ワンドにおける水生昆虫の結果をみるとワンドは良いからどんどん作っていこうということになるが、どのように考えているか？

（事務局）

・今後じっくり調査していかないとわからない。

（委員）

・ヨシノマダラカゲロウ、ミツトゲマダラカゲロウの出現は季節的なものであるが、ワンドB にモンカゲロウがいるということは砂地の環境になってきているのだと思う。もっと細かいデータを公開して欲しい。

・フラッシュ放流前に調査ができなかったのは残念である。

（事務局）

・データは示すようにする。フラッシュ前には調査できなかったが、融雪後には調査できたので今後のフラッシュ放流の調査を評価するための事前調査はできたと思う。

（委員）

・底生動物調査についてフラッシュ放流による生態系の復元という目的があるのでもっとデータを出して効果があったのかなかったのか示して欲しい。

・付着藻類についてはフラッシュ放流による更新があったのかなかったのか、種は何がいたのか示して欲しい。

（事務局）

・付着藻類の種は調べていない。今回、秋の調査と明らかにちがう藻類が繁茂してたので種を調べた。

・きっちりデータが取れるように今後どんな調査をしていくか等を次のテーマで議論したい。

■平成２２年度の弾力的管理試験の実施方針について

【スケジュール、実施方針】

（委員）

・今年度の委員会の開催時期はどういう予定か？

（事務局）

・昨年は 6 月から始めたが、今年はまず 10 月頃の開催を予定している。

（委員）

・まず大事なのは春季にフラッシュ放流をすることである。そして、さらに流量を増やすことも考えたほうが良いのではないか。その場合、例えば 150m^3/s のときどんな課題があるか、特に九頭竜川との合流点等について引き続き検討が必要である。

・真名川以外の川にも真名川での試験内容を適用することが考えられ、川幅をどんなふうに変化させていくのか、どんな川づくりをしていくのかを検討していただきたい。

・長期的な変化をとらえるために、必要・不必要な調査を見極めてメリハリをつけて実施していってはどうか。

・置土の施工について場所や量はどうするのか？

（事務局）
・置土の場所や量は今までと同じとすることを考えている。材料は下流河川から取ると粒径が粗くなってしまうのでダム上流にたまっているきれいな土砂を使うつもりである。
（委員）
・真名川には砂より砂利分が一番欠けているためそのような粒径の土砂が必要である。
（事務所）
・ちょうど足りていない粒径のものをダム上流から取ってくるようにする。

【調査計画】
（委員）
・調査計画がいきなり 5 年に 1 回となっているがこのように進めるのか？
（事務所）
・あと 2 年の試験期間では今までと同様の調査を実施し、その後本格運用にあたり調査を 5 年に 1 回にするかどうか等を決める予定である。

（事務所）
・次回委員会では今年度のフラッシュ放流の方針を決めたい。
・実施方針としては流量の調節に自由度がある春にフラッシュ放流を実施したい。
・事前調査はできないがフラッシュ放流後にきちんと調査していきたい。

以上